



みんなと共に
がんばろう!
東北

第26回 全国大会案内



秋田ふるさと村



JA 秋田ふるさときのご団地



なまはげ郷神楽



秋田キャッスルホテル

第26回 全国大会開催のご案内

謹啓 日頃は当協議会の運営にご尽力とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

本年、3月11日に発生しました東日本大震災は福島原発を巻き込み、日本に未曾有の大災害をもたらしました。地震や津波による被害を受けた東北・関東地区の会員は生産回復に向けて頑張っておられますが、未だ収束していない福島原発の放射能問題が消費に大きな影響をおよぼし、原材料や菌床の放射線量検査や風評被害対策など、生産者にとって厳しい状況が今後も予測されます。

さて、林野庁の統計によりますと、平成22年度の生しいたけの全国生産量は77,079tであり、前年比2.8%増加しています。栽培方法別では原木栽培が12,460tでマイナス8.7%と減少傾向にあるのに対し、菌床栽培は64,619tで5.3%増加し、占有率は83.8%まで高まっています。一方、生しいたけの輸入量は5,616tであり、平成21年の4,722tと比べて増加しております。

本年1月～10月の市況を見ると、国産品の市場取扱量は前年対比で96.2%となっています。取引単価は1～5月まで安価に推移し、6月以降は前年とほぼ同じ価格となり、1～10月の平均単価は前年対比97.2%となっております。また、輸入しいたけの市場取扱量は80.4%に減少し、単価も99%と前年を下回っております。

当協議会及び(株)北研は、このような状況の中、市場祭やフードデックスジャパン2011等のイベントで「サンマッシュ」をアピールし販売促進活動を推進してまいりました。さらに将来の消費者育成のため、(株)北研を中心に推進している食育活動も2年目となり、会員の皆様から地元あるいは消費地における食育活動の報告が多数寄せられています。今後も活動の全国展開に向けて皆様のご協力をお願いいたします。

また、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)の交渉参加に向けた協議に入る方針が示され、農業分野への影響が懸念されるなど、直近の課題である放射能対策をはじめ、農業に携わる者にとって厳しい状況が続きますが、我々会員にとって引き続き生産技術の向上と流通販売対策の構築が重要であり、全国サンマッシュ生産協議会の三大方針を実践していくことが使命と考えます。

- ①消費者に支持される安全安心な商品づくり
- ②サンマッシュ統一ブランドの推進
- ③女性部・青年部の設置とその活動の推進

第26回大会は東北復興祈念大会として秋田県秋田市「秋田キャッスルホテル」で開催します。恒例の総会後には、高崎健康福祉大学江口教授による「原発事故における放射能の現状と対策」、林野庁特用林産対策室による「農水省・林野庁の放射線対策及び施策」、放射能の影響を含めた「市場情勢と今後の対応」、視察地「秋田県の栽培技術と使用品種」の紹介、さらに「有望品種」を紹介いたします。また、2日目は東北の中でも有数の大規模産地である「JA秋田ふるさとときのご団地」を視察し、その後「秋田ふるさと村」を周るコースを設定しました。

品評会は回を重ねて第22回となります。出品は、ご自身の技術水準の確認にもお役に立て頂けます。選りすぐりの自信作の出品をお待ちしております。

放射能対策についての認識を共有のうえ、生産技術・品質・収量そして安全面でのサンマッシュの優位性を再確認し、併せて東北復興を支援する意義ある大会とするため、会員の皆様がこぞって参加されますようお願い申し上げます。

謹 白

平成23年12月吉日

全国サンマッシュ生産協議会
会 長 森 坪 清 則

第26回 全国大会 研修会

きのこ生産と消費に関する情勢

東日本大震災及び福島原発事故は農産物の生産に大きな影響をおよぼしており、いまだ原発事故の解決の方向性や見通しがはっきりしない中で、原木露地栽培の生しいたけや乾しいたけから、さらには福島県相馬市で菌床栽培の生しいたけからも基準値を超える放射性セシウムが検出されました。消費者に対する実質的及び心理的影響は計り知れないものがあり、しいたけ栽培の経営に大きな支障が出ています。

農水省及び林野庁は、総理大臣指示対象自治体及びその隣接自治体 17 都県のきのこ栽培に用いる原木・オガコ及び菌床用培地の生産・流通・使用の安全基準として、当面の指標値を 150bq /kg以下と設定しました。これらのことは厚生労働省の年間被曝量の見直しにより変更される可能性があります。

きのこ栽培の経営のかじ取りが難しい状況は、まだまだ続くと思われます。消費者が何を心配し、何を求めているのかを十分に見極めるため、生産者は的確な情勢判断をして経営の方向性や戦略を立てる必要があります。ここで求められることは、放射能の心配のないしいたけの出荷とその情報開示であり、また、価値の高いしいたけの供給です。今まで以上に、より品質が高く、しかも収穫量が安定した栽培しやすい品種や生産技術が必要とされています。

研修会の方向性

重大な関心事となっている、放射能に関する情報と対応方法について、精度の高い情報と信頼のおける対応方法を研修します。

今年の9月上旬、信州大学において「日本きのこ学会大会」が開催されました。日本きのこ学会は産学官一体となって、きのこに関する調査や研究及び開発等を専門的に探究することを基本としており、きのこ栽培農家や団体にとって身近で重要な学会であります。今回の大会では、福島原発事故に関する調査や対応方法についての報告など、我々生産者にとって重要な発表がありました。全国サンマッシュ生産協議会の会員は、これら放射能に関する情報しっかりと把握し、自信を持って栽培や販売を進める必要があります。

さらに、農水省や林野庁などの国としての施策や、今後の対策などについて直接説明を受ける機会をいただく予定になっています。

また、消費者の求めているしいたけの「価値」とは何か。美味しさ、機能性成分、調理のしやすさ等について、十分に認識する必要があります。しいたけの価値を高めるために、栽培技術の研鑽は重要であり、秋田県の視察地の生産技術と使用品種に関する詳しい情報を開示します。

併せて、今後販売を予定している新品種について、栽培特性や品質等を解説します。

研修会の内容

【原発事故における放射能の現状と対策】

高崎健康福祉大学

健康福祉学部健康栄養学科 江口文陽教授

きのこ類がどのように原発事故の影響を受けているのかについて精力的に調査し、その影響をいかに最小限に留められるかといった対策の研究も行っておられる、原発事故ときのこの関係に関する第一人者です。今回は日本きのこ学会における発表を公開いただき、現状の把握と対応について講演いただきます。

また、江口教授はこれまできのこの栄養や機能性成分について研究をされており、きのこの消費拡大や応用方法を提唱されるなど、きのこ業界に大きな支援をいただいています。

【農水省・林野庁の放射線対策及び施策（きのこの安全確保のための対応）】

林野庁林政部経営課 特用林産対策室（予定）

国の立場から、原発事故の影響について、きのこ生産者がどのように理解し、どのような対策をとるべきか、しいたけを中心に講演いただきます。

【市場情勢と今後の対応】

株式会社 北研 食用菌類研究所（予定）

放射能の影響も含めた市場情勢の直近の調査報告と、具体的にどのようなしいたけ販売の方法と方向が考えられるかを解説します。

放射線の内部被爆による発ガンリスクが問題になっていますが、抗腫瘍性などを含めたきのこの機能性成分の研究開発を含め、しいたけをたくさん食べることで健康な体質を作り、各種のリスクを軽減できる可能性など、宣伝拡販のヒントなどもお話いたします。

【秋田県の栽培技術と使用品種】

株式会社 北研 食用菌類研究所

秋田県の菌床シイタケ栽培状況を説明します。

今大会の視察地となる秋田県横手市平鹿町の仕込みセンターとパックセンターを有効に活用し、北研705号、607号、73号等を組み合わせた経営スタイルを紹介します。

特に北研705号が脚光を浴びつつありますので、北研705号の自然栽培適応品種としての特性と栽培方法について詳細な説明を行います。

【品種のご紹介】

株式会社 北研 食用菌類研究所

栽培しやすく、品質が良く、収量が上がり、収益性が高い。

経営安定のために、今まさにこのような品種が求められています。既存の品種を使いこなすことはもちろん重要ですが、新たな品種に挑戦することもときには求められます。

今回販売予定の新品種（空調栽培適応品種）は、このような生産者の要望にお応えしたいとの思いから育種されました。具体的な栽培特性を紹介します。

平鹿町ハウスの北研705号発生状況



空調栽培用新品種



視察地
紹介

秋田県横手市 JA 秋田ふるさと きのこ団地

鍛え抜かれた栽培技術とアイデアで

豪雪地のハンデを 吹き飛ばす！



▲ハウスが連なるきのこ団地

出荷アイテム

ボリュームのある北研705号

秋田県は東北地方の日本海に面した北西部にあり、北に青森県、南に山形県が隣接し、全国第6位の広い面積を有し、その7割は豊かな森林になっています。平成21年に秋田県で生産された生しいたけは3,680トンで全国第7位に位置していますが、県内の生産が躍進するうえで「JA 秋田ふるさと」が大きな役割を果たしています。JA 秋田ふるさと管内の平鹿地区、大森地区、横手地区のそれぞれに菌床しいたけ培養センターが整備され、平成22年度には約200万菌床が製造されています。

平成4年に平鹿地区は、稲作や夏野菜との複合経営の中で冬期間の作目として、完熟菌床による全面栽培からしいたけ栽培を開始しました。

現在、JA 秋田ふるさと平鹿町きのこ培養センターから春に接種直後の菌床を引取り、自然培養後に夏期カットを行い、秋～翌年春まで自然発生を行っております。栽培品種と方法は、北研607号の上面栽培もしくは半上面栽培が主体ですが、高品質、安定出荷を目指して新しい品種や技術の導入に積極的な会員が多く、最近北研705号が増えております。会員が生産した生しいたけは、JA 全農あきた県南園芸センターで共同選別され、横手市出身の矢口高雄氏が描く漫画「釣りキチ三平」のブランドで主に京浜市場へ出荷されております。

今大会の視察会場となる「JA 秋田ふるさときのこ団地」は、13名の栽培者が集まり、平成15年度しいたけ生産体制整備緊急対策事業を導入して、横手市（旧十文字町と旧平鹿町）に1棟約80坪の簡易ビニールハウスを52棟（第1団地34棟 第2団地18棟）建設しました。また、きのこ団地を建設したことがきっかけとなり、きのこ団地の栽培者が柱となって農事組合法人を設立し、平成19年度、平成21年度に補助事業の導入を行い、180坪の空調発生施設を9棟建設し、周年出荷体制の強化を図っております。

きのこ団地のハウスには豪雪地帯ならではの工夫が詰まっております。「地下水熱によるヒートポンプエアコン」を採用し、年間を通して水温の安定している地下水を熱源として利用し、ヒートポンプで熱交換しています。また、温水ポイラーでお湯を沸かし、菌床を載せる栽培棚の直管パイプの中に温水を通して菌床温度を高める「上面棚暖房方式」等々。きのこ団地には見所が満載です。豪雪地帯における厳しい環境の中で鍛え抜かれた数々の栽培技術とアイデアを是非ご覧になって頂きたいと思っております。
※視察地の横手市は豪雪地です。温かい服装と滑りにくい履物をご準備下さい。